様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０１２２

研究課題名（和文）オブジェクティヴィストにおける家族と言語の問題とイディッシュ語の影響

研究課題名（英文）The problems of family and languages and the influence of Yiddish on the Objectivist Poetry

研究代表者
宮本　文（Miyamoto, Aya）

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０５０７９３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：聖なる言語で男性と准えられてきたヘブライ語と、俗なる領域に属する言語で女性と喩えられてきたイディッシュ語の二項対立に英語という補助線を引くとき、ディアスポラに連動してその二項対立が様々な場面で、とりわけ家族関係で揺らぐことがリサーチの結果明らかになってきた。具体的な成果としては、このような問題意識の位置づけとして2013年に発表した講演録「ユダヤ系アメリカ文学における父子／母子関係」を挙げることができる。また海外のアーカイブ訪問で得た資料を元に現在、上記の論考を執筆中である。

研究成果の概要（英文）：Taking into consideration English for Jewish American, it destabilizes the traditional view of the relationship between languages and gender in Jewish culture that Holy Hebrew belongs to men and vulgar Yiddish women. I have tried to clarify that the destabilization can be seen especially family relationships in Jewish American literature, examining the Objectivist Poetry. For example, the paper "Father-Son/ Mother-Son Relationships in Jewish American Literature" published in 2013 works as a launch pad for the project. Also, I made research trips to the Archives in Austin, Texas and found the materials to support my argument. I am writing papers on the argument as written above to be published.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学　イディッシュ　アメリカ詩　ユダヤ系アメリカ文学　英米文学

１．研究開始当初の背景

修士課程から現在まで、英語を執筆言語とするユダヤ系アメリカ文学の系譜の中でユダヤ系初の文学運動と言われているオブジェクティヴィスト研究を続けている。そのなかで一貫した興味関心は「紋切り型が通用しなくなった状況に置かれたとき、人はどんな言葉をしゃべりうるのか」であり、文学はそのような危機的状況から生まれると考えてきた。そのような問題意識のもと、英語を執筆言語とするユダヤ系アメリカ人初の文学運動といわれるオブジェクティヴィスト研究を修士課程から現在まで続けてきた。

修士論文ではユダヤ人アイデンティティとアメリカへの同化という相克に対し、記憶と忘却のダイナミズムを装置として取り込みながら「アメリカのユダヤ人であること」を示し続けたオブジェクティヴィストのひとり、チャールズ・レズニコフを取りあげた。それ以降、修士論文ではあまり扱えなかったレズニコフの重要な作品『証言』やルイス・ズーコフスキーを取り上げてきた。現在まで、日本であまり研究されることがなかったオブジェクティヴィストの全容を、主に詩の技法という側面から明らかにしてきた。

オブジェクティヴィストはモダニズムのユダヤ人版と称されることが多い。実際に彼らが初めて世に出たのはエズラ・パウンドの後押しがあったからであり、オブジェクティヴィストたちが挙げる「見たままに、聞いたままに書く」という（一見素朴に見えるが）ラディカルなアジェンダは、パウンドの言うところの“Don’t tell. Show it”に類するものである。

また、詩の断片が不連続に連なっている“Discrete Series”というオブジェクティヴィストに共有されている詩形は、断片と集積がキーワードになるモダニズム文学全般に重ねることができる。しかしながら、パウンドを初めとしたモダニストたちの試みが、あくまで英文学の伝統を踏まえ、慣習的な言葉の伝統を壊し越えていこうとする運動から導き出されたものであったのに対して、ユダヤ系移民二世のオブジェクティヴィスト、チャールズ・レズニコフ、ルイス・ズーコフスキーにとっては、英文学の伝統は越えていくべきもの、というほど大きかったのだろうかという疑問が生じる。むしろイディッシュ語という要因がモダニスト的な手法に導いたのではないか、というのが本研究の出発点である。

2010 年度～2012 年度には文部科学省科学研究費補助金（若手研究(B)研究課題名「オブジェクティヴィストの詩の技法におけるイディッシュ語の影響」課題番号 22720099）を得て、特にチャールズ・レズニコフの『証言』の技法と語りが伝統的な詩型であるバラッドと相似していることに注目し、イディッシュ・バラッドを定点としてレズニコフの詩の技法におけるイディッシュ語の影響を研究し、現在まであまり研究されることがなかったオブジェクティヴィストの全容を、主に詩の技法という側面から明らかにしてきた。

具体的に言えば、　レズニコフは 1894 年、ズーコフスキーは 1904 年にニューヨークで生まれ、ロウワー・イーストサイドやブラウンズヴィルといったユダヤ系コミュニティーで育った。コミュニティーではイディッシュ語が飛び交い、イディッシュ語の新聞が発行され、イディッシュ語演劇などの娯楽も盛んであった。レズニコフもズーコフスキーもともに両親は家庭内でイディッシュ語を話しており、ズコーフスキーにおいては学校へ通うまでイディッシュ語を話しており、彼の最初の文学体験はイディッシュ語演劇でのシェークスピアの舞台で、彼の文学体験の原型はイディッシュ語を通して西洋文学を受容したものだったと言ってもいいだろう。

この問題に付随して、当然、次にイディッシュ語で育った彼らが、西洋文学の伝統に正統な嫡子であるモダニストと同じ手法を選択したのはなぜかという問題系が前景化してくる。もともと英文学的な伝統に根ざしていない、いわば英文学を中心とした西洋文学の非嫡子とも言える彼らにとって、モダニスト的手法をとったのは、正統な嫡子がそれまでの伝統的な英文学の表現が慣習的になりすぎて単なる紋切り型に陥ってしまったこと、それを打ち破り新しい表現を模索するという動機に基づいてはいない。なぜならば、そもそも英語で表現すること自体、イディッシュ語空間で慣れ親しんでいた知覚の様式を無効――あるいはまったく新しい表現をもたらす体験となったと考えられる。つまり、目指すところや完成した表現形態は類似しているものの、決定的にレズニコフやズーコフスキー達にとってモダニズムへ向かう動機はまったく違ったものだと言わざるを得ない。

また、彼らは毎日の散歩体験や日常の出来事を書くことが多いことも指摘しておきたい。というのも、アメリカの公教育を受けるようになり、英語を覚えると、それまで幼少期にイディッシュ語を通して眺めていた世界を必然的に英語（あるいは英語まじりで）という言語を通して眺めることになる。自分たちにとってとても慣れ親しんだ世界を英語で描写しようとしたときに、イディッシュ語空間で醸成された紋切り型は無効になり、それまで紋切り型で自動的に一連の物語として知覚されていた風景は断片化される。そして、改めて初めて事物と出会う体験を繰り返す

ことを余儀なくされる。

ちょうどモダニストたちがこれまで慣れ親しんできた英文学が、紋切り型に成り果ててしまった事を憂いて、言葉とイメージの結びつきを所与のものとせず、あたかも初めて事物とであったときに浮かび上がる新鮮なイメージと結びつけることで、英文学之言葉を新しくしようとしたことと、オブジェクティヴィスト達の試みは大枠で重なることが多い。

「よく見ること、よく聞くこと、そしてそのとおり描写しようと努めること」とズーコフスキーたちオブジェクティヴィストたちはオブジェクティヴィズムのアジェンダとして上記のことを挙げる。このような作業を必要としたのは、彼らにとってイディッシュ語で慣れ親しんできた世界と「もう一度始めから英語を通して出逢わなければならなかった」からである。その作業なしでに彼らは断片的なモダニズム的な作風を完成させることができなかったはずである。

本研究ではこれに先立つ研究から、オブジェクティヴィストの言葉に最初から内在するイディッシュ語体験という障害（必ずしも悪い意味ではない）によって、オブジェクティヴィストたちがモダニスト的な詩作方法をとらねばならなかったのではないか、いわば「オブジェクティヴィスト＝モダニスト」であることは必然であったのではないかという仮説のもとに研究をすすめてきた。

創作言語と母語が違う作家たちの研究は、ナボコフを始め、いわゆる亡命作家たちについて、近年とみに増えている。一方、オブジェクティヴィストのように創作言語を途中から変えたわけでもなく、積極的・意図的に創作言語ではないコミュニティーの言語をテクストに（例えば、方言として）援用している作家でない場合、コミュニティーの言語の影響を具体的に検証する研究は少ない。しかしながら、アメリカの移民二世や、場合によっては三世の作家の多くは、レズニコフたちと同様な言語的背景を持っている。表面にはテクストに浮かんでこない言語の影響を探ることはアメリカ文学研究にとって実りの多いものだと考える。特にオブジェクティヴィストはモダニストというメインストリームに接合していることからも、またモダニズム同様に（動機は必ずしも同じではないが）様々な言語的な実験が行われていることからも、創作言語に対するイディッシュ語の影響が探りやすいと思われる。

2010 年度に執筆した論文「チャールズ・レズニコフの『証言』とアメリカン・フォークバラッド」において、バラッドを定点とすることにより、階級や性差といった問題を含め総体的にチャールズ・レズニコフの詩におけるイディッシュ語の影響を抽出し検討した。また、この成果を踏まえて，イディッシュ語とヘブライ語の伝統的なジェンダー的役割に注目し、「母子関係」という新たな視座を研究に取り入れそれまでの研究の発展系として、研究を推進することにした。

また、上記の課題研究では、従来の先行研究があまり触れてこなかったイディッシュ語という側面に注目して、オブジェクティヴィストをモダニズムの系譜の中で改めて再定義することが目的であった。その結果、ユダヤ系アメリカ文学において父子関係より軽視されてきた母子関係を、ジェンダーと言語の交錯する場として読む事ができるのではないかという視座を得た。神と子の関係に准えられてきた父子関係を重視するユダヤ系文学でも、小説と詩では成り立ちもその後の発展も違うものであること、また女性と同等視されてきたドメスティックな領域に属するイディッシュ語の文学はバラッドなどの周縁的な声を拾うのに適した形式などを通して伝達されてきたこと、これら二つは先に述べたように前回の課題研究で派生的に浮かんできた問題系である。

本研究では更に発展した形でとらえ直し、聖なる／男性の言語とされてきたヘブライ語と俗なる／女性の言語とされてきたイディッシュ語の二項対立に、英語という補助線を引いたとき、その二項対立が様々な形で揺らぎ、その結果、従来軽視されてきた母子関係がより重要な場面で顕在化してくるのではないかと仮定したことが研究の背景である。

２．研究の目的

オブジェクティヴィストたちのイディッシュ語体験と彼らの詩作の関係を明らかにし、オヴジェクティヴィストを再定義することが目的である。そのためにはまず、イディッシュ語とヘブライ語の伝統的なジェンダー的役割に注目し、「父子関係＝神子関係」（ヘブライ語の領域に属する聖なる領域）にのみ注目されがちなユダヤ文学（ユダヤ系アメリカ文学も例外ではない）に、「母子関係」（家庭の言語、女性達の領域に属する俗なる言語とされているイディッシュ語とも関係が深い）という新たな視座を研究に取り入れ、更には「移民体験」というそれまで中心にいた男性が新世界で周辺化され、その結果「男性性」が奪われるという構造を補助線に、アメリカ詩、またアメリカ文学に触れながら、入り組んだジェンダーと言語の関係を整理しつつ、オブジェクティヴィストの「見たままに、聞いたままに書く」というアジェンダや、「不連続の連続」という詩形が、他のモダニストたちと同様の出自ではなく、イディッシ

ュ語体験により導き出されたものだということを明らかにすることを目指す。

更に言えば、従来のユダヤ系文学にとって重視されていた父子関係に加えて、母子関係がオブジェクティヴィストの主要メンバーが置かれていた重層的他言語空間（英語、イディッシュ語、ヘブライ語）に踏入り、彼らの詩作が以下にジェンダーと言語のアクロバティックな交錯のなかで豊かに醸成されていったのかを明らかにするものである。

３．研究の方法

本研究は主に文献を入手して研究し、論文を執筆するというスタイルで進められる。論文については各テーマに分けて執筆し、最終的には「オブジェクティヴィストの再定義」というところまで論じる予定であった。期間内には最終的なまとめの論文執筆には至らなかったが、現在も本研究の成果を踏まえて執筆中である。

また付随して資料収集のためのリサーチ旅行とイディッシュ語の習得ということが研究遂行には必要であった。イディッシュ語の影響を伝記的な側面から実証する必要があるため、オブジェクティヴィストの資料がアーカイブにリサーチ旅行へ行く事、またイディッシュ語の習得には下記に詳しく挙げるイディッシュ語勉強会に参加する事で研究遂行に努めた。

４．研究成果

成果として主に以下の三つが挙げられる。第一に 2012 年 12 月に情報文化学会で行った講演「ユダヤ系アメリカ文学における父子／母子関係」に大幅な加筆・修正を加えて同学会の学会誌『情報文化論』第 10 号に同タイトルの論文を掲載したことである。元になった講演は、2010 年度～2012 年度の課題研究と本研究の橋渡し的な位置づけとなるものであった。2012 年 12 月発行の同タイトルの論文では、本研究の目的に照らして、講演の原稿に比べてよりユダヤ系アメリカ文学における「父子関係／母子関係」について言語とジェンダーの関係性にフォーカスを当てたものになっている。

第二の成果としては 2012 年 9 月および 2013 年 8 月に資料収集を目的としてアメリカ・テキサス大学でリサーチを行った事である。同大学のハリー・ランサム・センターには本研究の中心となるオブジェクティストの資料がアーカイブとして収められており、とりわけイディッシュ語の影響を伝記的な側面から実証するためには同センター所蔵の資料が必要であった。このときに収集した資料は第一の成果にも反映されており、また本研究の期間内には出版できなかったものの、この資料を元にして現在、本研究のまとめとなる論文を執筆中である。

第三の成果としてはイディッシュ語の習得である。本研究は言語とジェンダーの錯綜した関係を解きほぐすことによってユダヤ系アメリカ文学における「父子関係／母子関係」を重層的にとらえ直すものである。したがって、女性（＝家庭・世俗の領域）と結びつけられることの多いイディッシュ語を習得することは、研究遂行には不可欠である。イディッシュ語は言語であるため、継続的に学習する必要があり、2008 年から参加しているイディッシュ語勉強会に参加し、イディッシュ語およびイディッシュ文化による理解を深めることができた。

第四の成果として発表という形で成果を外に出さなかったものの、資料収集や学会や勉強会での意見交換を活発に行うことができた。その結果、父子関係の系譜やモチーフを重視するユダヤ系文学でも小説と詩では成り立ちもその後の発展も違うものであること、また女性と同等視されるドメスティックな領域で話されていたイディッシュ語の文学はバラッドなどの周縁的な声を拾う形式などを通し伝達されてきたこと、これら二つは本研究に先立つ研究でも派生的に浮かんできた問題系であるが、今回更に発展した形でとらえ直した。

具体的に言えば、聖なる／男性の言語とされてきたヘブライ語と俗なる／女性の言語とされてきたイディッシュ語の二項対立に、英語という補助線をひいたとき、その二項対立が様々な形で揺らいでいく。移民のアメリカへの同化を英語という言語へ組み込まれることだとすると、英語は父にとっては聖なる言語の特権性を奪い、また英語が不得手という点において家父長的なポジションを危うくするもの、ひいては先に挙げた二項対立を揺るがすものになる。

また母子関係においては優しいイディッシュ・マメから口うるさいジューイッシュ・ママへの移行となって顕われる。そのような中、新世界ではヘブライ語を学ばず、幼少期にはイディッシュ語環境で育ち、公教育で英語および英文学を学んだユダヤ系 2 世の詩人たちの詩作は自ずと実験的なモダニズムとなる。現在は資料整理を終え、成果を発表すべき論文執筆中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

１．宮本文. 「アメリカ文学における父子／母子関係」『情報文化学会』第 10 号、2012 年.